

## 法華経と宮沢賢治

新井野洋子

### 一

宮沢賢治は、自己の創作を「法華文学」と言いました。「心象スケッチ」と称する。それは、「文芸ではない」「心理学的な仕事の支度」などとも述べられている（書簡二〇〇）。

本論は、この賢治の法華文学における特異な手法「心象スケッチ」とは何か。それはまた、法華信仰といかなる関連を有するのか、その本質を考えようとするものである。

賢治の遺言は、次のようなものであった。

合掌、私の全生涯の仕事は此経をあなたの御手許に届け、そして其中にある仏意に触れてあなたが無上道に入られん事をお願いするの外ありません。

ここには、生涯がすべて法華経を伝える実践であり、作品が、みな「悟り」（無上道）を願ってのみ書かれた旨が伝えられている。

その創作を、「雨ニモマケズ手帳」は語る。

筆ヲトルヤマズ道場観 奉請フ行ヒ所縁仏意ニ契フヲ念ジ 然ル後ニ全力之ニ従フベシ：法衆スベシ。：オノレガ小才ニ非ザレ。 々々諸仏菩薩ノ冥助ニヨレ。

賢治の法華文学は、諸仏菩薩の冥助による「仏意ニ契フ」として創作され、賢治自身の「法衆」であった。明らかに、普通の文学のあり方を越えている。それは、賢治の受け止めた「仏意」として創作されている。

### 二

賢治の法華入信は、大正三年（一八歳）、島地大等『漢和対照妙法蓮華経』との出会いが契機とされる。だが賢治は、その編者島地氏に、経典刊行以前に既に面識があり直接の法話も聴いていることが知られる（『堀尾年譜』）。

賢治の中学三年、明治四四年八月四〜十一日、賢治の父は、主催する仏教講習会に大等を講師として招き賢治も聴く（『大乘起信論』）。賢治は、翌大正元年の大等の夏期講習会にも出

席。初めて法華經に触れたのが、中学卒業後の大正三年とは考えにくい。その後、大正四年にも大等の講習会を聴講、五年には、大等を個人的に訪ねていることも知られる。

この経典は、天台学の大綱などをも付し学習者に資する形で編纂されている。島地氏は、賢治の家と同じく浄土真宗の学僧であり、また天台学の碩学であった。このような事実から、賢治の受容した法華経観の根底は、天台法華教学にありまた島地氏のそれに依ると見てよいだろうと思われる。

一方書簡には、賢治が「悟り」を願い、ひたすら修行に励んだ事実が明確に把握される。「自ら勉勵して法華經の心をも悟り奉り……」（書四四・二一歳）、「如来第一義を解し奉る為に修業して……」（書四九・二二歳）など。賢治の、この「悟りの願いと行」に、明らかに教観二門の天台学があるとわかる。観心行が必須とされる（四種三昧：『摩訶止観』）。賢治は、大正二年、中学五年以来しばしば参禅をしたという。

賢治は、誓願も立てている（一九歳）。書簡にも、「四つの願を起した事……」（書一九六・二四歳）、「昔の立願を一応段落つけようと……」（書四八四a・三七歳）などが見える。この「四つの願い」とは、摩訶止観に依れば、十乘観法第二起慈悲心の「四弘誓願」ということになる。死の直前の「昔の立願」の語が、これを裏づけている。賢治の生涯が、この誓願を貫いた菩薩行であったことが理解される。それは、遺言の意に

合致している。

### 三

賢治の法華文学の創作は、大正一〇年に決意された（二四歳）。大正二年の参禅以来、七、八年程の修行がなされていたことになる。

書簡には、多くの真摯な観心行の記述が見られる（一念三千など）。後の創作「心象スケッチ」のあり方は、書簡に見る「観心」に基本的には同じ世界であることが認められる。つまり賢治の「心象スケッチ」とは、観心における自らの「内観内証」の文学的表現と捉えられる。創作は、修行で培われた能力によって成立したとも言い得る。

例を上げたい（\*印：書簡・○印：作品）。

\*静かに自らの心を見つめせう。この中には……一切の諸象を含み現在の世界とても又之の外ありません。……之から真実に深く深く求めねばなりません。悟ると云ふことはそれを悟るのでせう。  
（書四九・大正七年）

○畢竟こころのひとつの風物です……（すべてが私の中のみんなであるやうにみんなのおおのなかのすべてですから）

（『心象スケッチ 春と修羅』序）

\*これが私の頭の中の声です。声のまゝを書くからかうなったのです。  
（書一五七・大正八年）

○狐小学校があるといつてもそれはみんな私の頭の中にあつたと云ふので決して偽ではないのです。  
（茨海小学校）

結局賢治の文学は、根本に「観心」（禪定）がありその中から生まれたということである。創作はまた、実際の直感的な一体感・体験に基づいてなされたという（証言がまとめられている）。それは、単なる文芸ではない。

その文学は、性質として次にも当たると考えられる。

華嚴は海印三昧という禪の内観を説き、法華は無量義処三昧の内に入ってその修証の法門を説かれ、…その他如何なる大乘經典でも定を根本としたもので、定中所証の実感実証の法門そのままが大乗經典であります。

（島地黙貌編『島地大等講話集』百華苑 一一二頁）

これは、大乘教の成立に「定」があることを述べている。賢治の「内観」の描写（心象スケッチ）は、本質としてこの大乘經典のあり方に一致する形になるとみなされる。

この意は、天台の「心仏及衆生、是三無差別」（『法華玄義』二上）にも符合する。これに依れば、賢治の「心法」は「仏法」である。

賢治は、その作品を、「文芸ではない、心象のスケッチでしかない」とし、「心理学的な仕事の支度」などともいう。

あゝわたくしの恋するものは  
わたくしみづからつくりださねばならぬかと

（『産業組合青年会』先駆形）

この詩にも見るように、賢治は、真実の悟りを希っていた。結局賢治は、仏教の伝統や教理にのっとり「新仏法」ともなり得る創作を意図したと考えられる。「心理学的な仕事」とは、これを指すとみられる。仏教の手法を踏むことなしに、仏教は成り立たない。

賢治の法華文学は、仏教において、本来的には一つの新しい「大乘經典」にも価する本質を備えていると判断される。その、科学を含む多様な内容は、賢治自身の新たに体得し観得した「法」（真理）であり、伝統を継承した本質的な「新法華仏教」を表現していることになり得ると思われる。それは、賢治の当初からの「願い」であったようだ。

我等と衆生との幸福となる如く吾をも進ませ給へと深く祈り…

（書四六・二二歳）

ここに、島地大等『漢和对照妙法蓮華經』の次のことばが想起される。

仏法何くにかあらんや、悲しい哉正法の興らざる真因茲に在矣、然れば則ち修道に志あるもの三思して正に解行一雙の必要を失はざれ。  
（『法華大意』一四頁）

〈キーワード〉 法華文学、心象スケッチ、摩訶止観、新仏法

（立正大学大学院）